

多角的語彙指導がEFL学習者の語彙学習方略および学習目標に与える影響

— 定量的分析に基づく効果検証 —

塩入 潔乃 (田園調布学園 中等部高等部)

E-mail : yukino.shioiri@chofu.ed.jp

実践年度

2025年

1. 研究背景と目的

1.1. 多様な語彙学習方略使用の効果

- 多様な語彙学習方略を組み合わせた使用の重要性 (Wen, W. N. L., & Naim, R. M., 2023)
- メタ認知的・能動的語彙学習方略の使用と高い学習成果との関連 (Gu, Y., & Johnson, R. K., 1996)
- 語彙への深い関与を重視した体系的・長期的な語彙学習の必要性 (Schmitt, N., 2008)

1.2. 他者との協働による相互作用

- 仲間や教師とのやりとりを通じた社会的学習方略の有効性 (e.g., Wen, W. N. L., & Naim, R. M., 2023)

4月当初の学習者の様子

(1) 学習の形骸化と動機づけの欠如

- 多くの学習者が単語帳を漫然と眺める「受動的な学習」に終始し、動機づけが低い状態。また、学習への明確な目的意識が低い現状。

(2) 「丸暗記志向」への固執

- 「とりあえず暗記すればよい」という雰囲気蔓延。語彙の背景などを考えず、形式的暗記中心の学習スタイル。

(3) 学習方略の硬直化

- 多様な学習方略を用いることなく、単一の学習方略を使用する傾向。また、他者とのインタラクションを通じた語彙学習は散見されず。

● 研究目的 ●

英単語学習における「質の低い安定状態」にある日本人EFL学習者に対し、語源提示・音韻情報の提供・品詞のネットワーク化などの多角的語彙学習方略の指導を行うことで、意味理解を伴う高度な学習観への変容可能性を検証。

● 今回実施したこと ●

(1) 語の「核」を捉える意味理解指導

語源や由来の教示、日本語既習概念との関連づけ、派生語のネットワーク化。

(2) 音韻情報の強化

発音練習を通じた英単語の綴りと音を一致させる活動、音読や書き取りを組み合わせた具体的な学習方略の提示・推奨。

(3) 学習観と方略使用の定量調査

介入の事前および事後に質問紙調査を実施。学習者がもつ「一般的学習観」、「語彙に関する学習観」、「普段使用する語彙学習方略」、「語彙学習目標」について調査。

2. 調査概要と結果

調査期間：2025年9月から2025年12月

調査協力者：日本人EFL高校2年生（30名）

質問紙：① 一般的学習観（24項目8因子） ② 語彙学習観（8項目2因子）
③ 英単語学習方略（25項目3因子） ④ 語彙学習目標について（8項目2因子）

分析方法：対応のあるt検定を用い、介入前後での平均値の差および効果量を算出。

9月

「眺めるだけ」「丸暗記のみ」で、関連づけや反復、意味理解が低い傾向。

介入前の課題 語彙学習における「停滞」の実態

● 方略使用の低迷（関連づけ方略・反復方略）

「単語帳を眺める」の受動的な学習スタイル。英単語をネットワーク化する意識や、効果的な反復学習の欠如。

● 質の高い学習志向の不足（意味理解志向・失敗活用志向）

「とりあえず暗記すればよい」という表層的な学習観。英単語の背景への関心や、間違いや失敗を次の学びに変える意識の著しい低さ。

● 活用目標の欠如と動機づけの限定化

学習目標が「眼前のテスト」にのみ限定。英語を実際に使用しようとする長期的・自律的な動機づけの不在。

介入後の成果 語彙学習における「質的転換」の実現

● 方略使用の多角化と深化（関連づけ方略・反復方略）

一つの英単語をネットワークとして捉える「関連づけ方略」の定着。音韻情報（発音）と文字を一致させた、能動的かつ効果的な反復学習への転換。

● 「意味理解」を基盤とした高い学習観の形成（意味理解志向・失敗活用志向）

語源や背景への関心に基づいた「意味理解型学習観」への移行。間違いや失敗を自身の弱点把握や学びの機会として捉え直す意識の変容。

● 活用目標へのシフトと自律的学習動機の醸成（活用目標）

「テストのための暗記」から、英語を自己表現の手段として捉える「活用目標」の顕在化。長期的視点に基づいた、自律的な学習姿勢の形成。

処遇前後の変化

→9月の平均 →12月の平均

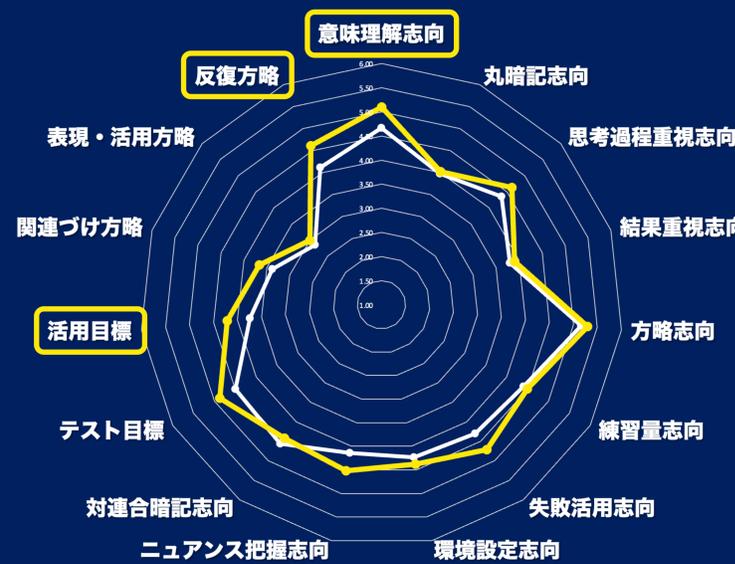


表1. 学習観および方略使用の変容 (n = 30)

	Pre M (SD)	Post M (SD)	t	p	Cohens' d
意味理解志向 (英語に関する学習観)	3.25 (0.85)	4.12 (0.78)	-3.41	.002	-0.62
活用目標 (英単語学習の方法)	2.90 (0.92)	3.85 (0.88)	-3.19	.003	-0.60
反復方略 (語彙学習目標)	3.10 (1.10)	4.05 (0.95)	-3.52	.002	-0.62

注：負の効果量は、事後調査（12月）におけるスコアの向上を示す。

3. まとめ

考察

- 英単語の語源教示などによる「意味理解志向」の向上。単一の訳語暗記から、単語の核を捉える深い情報処理への移行。
 - 深い処理の定着（意味理解志向の向上）
- 「活用目標」の向上に伴う、具体的な「関連づけ方略」の定着。発信意欲の顕在化による、既習知識と未知語をつなぐ高度な学習行動の誘発。
 - 目標の高度化と方略の連動（活用目標・関連づけ方略）
- 英単語の発音練習による「反復方略」の有意な改善。単語帳を眺めるだけの学習から、音と意味を一致させる能動的な学習への変容と、「自己調整学習」のサイクルの形成。
 - 音韻情報の教育的効果（反復方略の改善）
- 「丸暗記志向」に有意な低下が見られない点に着目。従来の学習方略（丸暗記）と「理解・活用」を伴った学習スタイルの並存。
 - 学習スタイルの高度化（丸暗記志向の維持と共存）

今後の展望

- 【意識変容の持続性と定着度の検証】
3ヶ月間の介入による学習観変容の長期的な維持、および受験期などの高負荷状況下における学習方略の推移（e.g. バックスライディング）の追跡調査の実施。
- 【語彙習得成績との相関分析】
学習観の変容が語彙サイズ（テストスコア）や自由英作文などの語彙多様性に与える影響の定量的な分析による、指導の有効性の多角的な証明。
- 【ICTを活用した自律学習支援の検討】
語源や派生語のネットワーク化を促進するデジタル教材・アプリの活用、および個別最適な学習を支える自律学習習慣の構築。

参考文献

- Gu, Y., & Johnson, R. K. (1996). Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46 (4), 643-679.
- Schmitt, N. (2008). Instructed second language vocabulary learning. *Language Teaching Research*, 12 (3), 329-363.
- Wen, W. N. L., & Naim, R. M. (2023). Vocabulary learning strategies (VLS) in second language acquisition (SLA): a review of literature. *International Journal of Language, Literacy and Translation*, 6 (2).